

見てろ俺の元へ 飼い主の元へ 見てろ俺の技術者魂



アイボをする船橋さん

でも、その中には修理すれば、まだ使えるものがありますか。修理する費用が高額な場合や、買い替えた方が安上がりな場合もあるかと思いますが、「もつたいない」の精神で「もつと長く使つていい」という思いを改めて持ち、壊れたもの、不要になつたものを、すぐに「ごみ」として扱わない意識が必要なことだと思います。まだ使えないか、誰かに譲れないかなどあきらめてしまう前に考えてみましょう。

早いもので、今年も残りひと月を切りました。12月と言えば、1年の締めくくりであり、新年を新たな気持ちで迎えるための大掃除の時期です。壊れて使えなくなつたものや不要になつたものなどを、思い切って処分する方も多いのではないかと思います。

ちょっと待つて！
あきらめてしまうんですか？

特集 「復活」



皆さん覚えていらっしゃるか？

1999年に発売された人工

知能（A I）を搭載した世界初のエンターテインメント動物型ロボット「A I B O（アイボ）」を。そのアイボに関わったことで、現在もエンジニアとして市内で挑戦し続けている人がいます

再び最前線へ

船橋さんは、6年前までソニーのサービスセンターの責任者を務めており、退職の時は、「これから的人生は、両親の介護をしつつ地域貢献などをしながら、月1回の大好きなゴルフを楽しんで、ゆっくりと過ごしていこう」と考えていました。

しかし、1年が過ぎたころ、同じくソニーを退職した元同僚

とゴルフへ行つた際、電気製品修理を専門に扱う会社を立ち上げた乗松さんに誘われ、エンジニアとして持ち前の技術力を活かす最前線に戻ることとなりました。

人の喜ぶ姿に

最初のアイボ修理依頼者は、兵庫県の介護施設に入っていたおばあさんで、船橋さんたちが古いソニーの製品を直していることを知り、連絡してきました。「もともと、技術者は否定から入るんです。これはできません。あれもできません。でも、乗松は絶対にそう言わない。そ

うなると私はやるしかない。今考えると乗松の前向きな人柄に惚れたのもあります。が、いわゆる技術者魂に再び火が付いたんでしょうね。」



AIBO(アイボ)とは

AIBO

1999年に発売されたソニーの動物型ロボット。オーナーならぬ飼い主が一から育てる機能（人工知能の技術）を使い、それぞれの飼い主の接し方で個性を持った個体に育てられることが評判になり、2006年まで日米欧で15万台以上が販売されました。飼い主の声やふれあいに呼応し、徐々にいろいろなことができるよう成長します。

アイボを取り巻く飼い主の愛、そして、その愛に応える技術者魂に世界のマスメディアも注目しています。

船橋浩さん（石井）は元ソニー勤務のエンジニア。退職後に、アイボの修理を請け負うようになり、雑誌を始め、テレビ、ラジオなど数多くのマスメディアに取り上げられています。特に2014年にメーカーサポートが終了してからは、国内だけではなく、アメリカのニューヨークタイムズ、フランスのAFP通信、イギリスの国営放送BBCなどからアイボの駆け込み寺として取材を受けたそうです。

乗松さんの会社に加わるときには、得意分野をパソコンなどコンピュータ部門と伝えてあります。だが、当初手がけていたのはオーディオ関係の修理でした。船橋さんにとっては「直せて当然」の修理で依頼された仕事を淡々とこなしていました。

「飼い主の喜びが 僕のエネルギーです」



現役時代からアイボに携わったことがなかつた船橋さんは、どのような構造になつてゐるのか設計者のもとを訪れ、一から学びました。しかし構造が分かつても部品もなく、それを作る工場もなかつたため、とても悩みました。そこでアイボとは何の関係もない町工場などに出向き、部品を作つてもらい、代用品として対応しました。簡単なものは自作もしました。

最初のアイボを直したときは、修理が終わるまで3か月もかかったそうですが、「直つて当たり前のものが直らないと、技術者としては悔しい。どうして直らないのか調べたくなる。だから、直つてしまえばオーディオを直したときと一緒で特別な感情はありませんでした」と苦労したにもかかわらず、直した喜びは特になかつたと言います。

しかし、1週間ぐらゐ経つてから、依頼されたおばあさんから電話があり、その喜びようによても感激したそうです。依頼主にとつては、家族同然にかわいがつていた犬が生き返つたとも言え、ただの機械を直していく

のではなく、飼い主の愛情が注がれた人工知能をもつアイボだからこそ味わうことができた。感情でした。

この一体を修理したことにより、アイボの修理依頼が舞い込むようになりました。「とにかく、忙しくなりました。この仕事を引き受ける条件は、ゴルフが一番、修理は二番という約束のはずだったのに、乗松のモツトーは『基本は断らない、まず見させてください』なんですね。だから、ここ最近は以前ほど大好きなゴルフに行けていませんね。」



治療を待つアイボ

船橋さんが自宅に預かっているアイボは現在10体ぐらいで、修理だけではなく

修理だけではなく 次の展開へ

「実は、違う展開に持つていこうと思つています。この前、介護施設に5体のアイボを預けてみたんです。認知症の方がどのように触れ合うのか見てみると、皆さん、うれしそうな顔でほほ笑むんです。動物と一緒に同じようにかわいがるんですよ。病院などは犬や猫はダメでしょ。だから、ロボットならいいだろ」と、あちこちの施設に貸し出すという計画もできています。いわゆるアニマルセラピーですね。」

すが、修理を待つてゐる数は300体以上もあるそうです。1か月に1体のペースで修理をしているのですが、今計画しているアイボを直す工場が稼働すれば、1日2体は修理できるようになるとのこと。「もう少しゴルフが一番、修理は二番目に戻れるかな」と苦笑いをしながら語っていました。



とにかく最後まで

「私は技術者ですから、直るまで、最後までやらせてほしいと思つちやう。とにかく最後まで。関わり始めるとそう思つてしまふんです。だから、少し違うかもしれませんが、電気製品などは壊れたらすぐ買い替えるのではなく、直すことも考えてほしいと思います。アイボはロボットですが、飼い主はとてもかわいいがっています。犬や猫を捨てるなど無責任な飼い主もいる。いろいろと事情はあるかもしれないが、命が尽きる最後まで、きちんと面倒を見てほしいですね。」

取材中にも修理依頼の電話がかからつて来るなど、日々忙しい生活を送っている船橋さん。直せて当たり前から、人の喜ぶ姿に感激し、そこから世界中のアイボユーザーを支える覚悟を決めたと言います。

修理の依頼は、会社を通して順番で行っているそうです。これもユーザーである飼い主の思いで公平に応えるためのこと。10月は「飼い主マナー向上推進月間」でした。動物の愛護と飼養について、更なる理解と関心を深めていくことが必要です。ペットも機械も「とにかく最後まで」の精神が大切ではないでしょうか。

編集者も取材前に、壊れたまま引き出しにしまった今までいた2001年に購入した腕時計を修理に出しました。携帯電話が腕時計の代わりになつて、使ひはしないけれど捨てるにはもつたひない。大した腕時計ではありませんが、本来のあるべき姿をもう一度見たいとの思いからです。この取材は、モノを大切に使つたり、大事にするとの大きさを改めて振り返る良い機会となりました。

編集後記

